
義妹と忠犬引き連れて転生したので、好き勝手に楽しむ！

メア

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義妹と忠犬引き連れて転生したので、好き勝手に楽しむ！

【Zコード】

N4496BA

【作者名】

メア

【あらすじ】

神様に殺された変態がデジモンアドベンチャーの世界で好き勝手します。

ご都合主義と反則能力多数です。

後、微太一アンチ（ヒカリについてだけ）

かなりの変態です。ヒカリちゃんにペロペロする為に命を賭けるくらい。

プロローグ

此処は何処だろ？ 確か、神羅フロンティアをやりながら、デジモンアドベンチャー01を見て、この神作最高！ ヒカリちゃんをペロペロしてえとか思つてたんだが…………何がどうなつたんだ？

「貴様はパソコンから突如放電し、脳死した。その後、ドナー登録されていたおまえの身体は様々な人の役にたつた」

「なんだつてえつー？ まだ、色々やりたい事があつたのにー！」

「（脳死の部分しか聴こえて無いんだろうな）まあ、天罰だ。諦める」

「嫌だ！ テンプレートな展開を希望するー 神様助けてー！」

「報告では」こちらのミスもあるが…………

あれ、本当に神様？ 姿はなぜかゼノン様だけビ。

「何それ？」

「つむ、部下が“コイツキモい死んじゃえ”と言つて作業していたら…………それをたまたま聴いた死を司る部署の奴がその言葉を正しこと思い、それをそのまま受理してしまつたのだ」

なんだつてえつ！？

「しかも、隠蔽する不始末まで起こしたのだ。気付いたのは、お前の心臓によつて命が救われ、定めを超えて生きた少女のお陰だ。その少女はお前を思い、世界史に残るような偉業を成し遂げ、数々の人々を救つた」

「役に立つたんだな」

「ああ。それでだ、役に立つたんだからもう良いだろ？」

「やうだな。もう良いや」

「んな訳あるかっ！ 確かに役に立つたかもシレネエが、俺は満足してねえつ！」

「ちつ、上手く誤魔化せたかもしれんかっただが…………黙目か。」

「ゼノン様の格好をしてる癖に……」

「これは貴様の心がそう見せていいるだけだ。まあ、テンプレートではあるが転生させてやる。貴様には少女が救つた死ぬはずだった人間の分も含んでかなり改竄させてやる。何がいい？」

「努力すれば全てが無尽蔵上がつて行く程度の能力。あつ、不運とかはいらないから。後、行く世界は？」

「つむ、デジモンアドベンチャーにしてやれ。我に感謝せよ」

「ありがとう神様！ それじゃデジヴァイスだけど……」

「デジヴァイスは初期の形で、D3、ディーアーク、デジヴァイスIIC、クロスローダーの機能を入れておいてやる、サービスで武装などのカードは付けておこう」

無いと意味ないしな。

「パートナーデジモンは何体まで行ける？」

「クロスローダーの機能があるのだ、好きにしひ。何なら、オリジナルでも構わん」

「なら、一回目はムジナ」

「待て、神羅万象フロンティアか？」

「うん。ムジナ、黒刀ムジナ、黒刀斬姫ムジナって感じ？」

「完全体はあつちか、良からひ。ただし、私はフロンティアしか知らぬから性格は保障せねど」

よし、後一体欲しいな。

「後一体は特殊なのがいいな～」

「なら、無限に成長する竜はどうだ？」

「何?」

「ウロボロス」

「ちよつ、是非可愛い女の子でお願ひします」

「任せろ。どちらも、デジモンを殺し、そのデータを吸収する事で力を増す様にしておく」

「後は…………紋章かな?」

「なら、闇の紋章と吸収の紋章で良かろつ。闇はその通り、吸収は他人の紋章の力を得る。まあ、粘膜摄取か血を飲むぐらいだな」

「じゃあ、デジメモリも付けといてくれ」

「分かった。転生場所は八神家の近くにしてやる

「ども」

そして、テンプレート通りに落とされた。

「まだ余つておるな…………」

「あの、すいません」

「どうした？」

「例の女の子が、あのゲスに御礼するって聽かなくて……」

「なら、ソイツも転生させてやれ、どうせ余っているんだから構わん」

「了解しました」

俺が丹島コウヤに転生してから三年が立つた。その間にやった事は勉強だ。それも特に医学について学び、薬を開発するまでになつた。特典の力は化け物だ。

「マスター、お勉強の時間です」

俺に話し掛けて来たのはウロボロモンのエセルドレーダのちつこ二掌サイズ犬耳版。つまり、そういう事だ。

「じゃあお願ひ

「はい」

知識はかなりあるので、家庭教師になつて貰つている。

「ノ」飯よ～～

両親の呼び声を聴いて、勉強を止めた。それから、ヒヤルドレーダをデジヴァイスの中に戻してリビングに向かつ。

リビングには母さんと同い年の義妹がいた。

「ま、しつかり手を洗つのよ

「は～～」

義妹の奏はお母さんを手伝つて、橋とかを食卓に運んでいる。

「相変わらず、一人は賢いわね

手を洗つてから、俺も一緒に手伝つて準備する。

「　　「頂きました」」

「飯を食べながら考えるけど、やつぱりお父さんは仕事が忙しいみたいだ。

「お母さんは仕事してるから、早く寝なさいね

「「はーこ(はこ)」」

「『飯を食べ終えたら、可愛い義妹と遊ぶ…………抱き合ひて夜空を
ベランダから見上げるのが日課だ。』

「お兄ちゃん、あれ」

「今日がそつなんだ。ちょっと行ひへべる」

「私も行く」

「分かつた」

一人で急いで着替え、じつそり外に出た。

空には『デジタルゲートが開いていて、綺麗な光景になつていてる。

「恐竜?」

「グレイモンとパロットモンだな。丁度いい、エセルドレーダ行つ
てこ………カードスラッシュ天狼星の!」

黄金に輝く!を装備させて、俺はデジモンの足元へ行く。

「何だお前は!」

「うわあこ、どかー」

太一をビけて、ヒカリちゃんを見ると熱が凄い。

「ちつ、薬はあっても水が無いな」

だから、ヒカリちゃんを抱き上げて、薬を自分の口に入れて、口移しで直接ヒカリちゃんの口に入れた。

「んんっ！？」

唾液を流し込んで、無理矢理飲ませる。

「お前っ！？」

「お兄ちゃんの邪魔はさせない」

「くっ、離せ！」

太一は奏に任せておけば大丈夫だな。

それから、ヒカリちゃんの口を堪能しつつ薬を飲ませた。

「あっ、あっちも終ったかも」

「ん～～」

ぼ～としているヒカリちゃんと空を見るとボロボロになつたグレイモンとパロットモンに向かつた大量の光輝く矢が一匹のデジモンを次々と串刺しにして殺した。そして、そのデータが全てエセルドレーダに吸収された。

「これでヒカリちゃんは大丈夫だな」

「お前、ヒカリに何を飲ました！」

取り敢えず、上着を脱いでヒカリちゃんに着せた。

「薬だ馬鹿野郎！ 一人を連れて行くぞ」

俺はヒカリちゃんを抱っこして八神家に連れていった。

「うん」

「あれ、太一は？」

「氣絶させた」

「さすが半分…………いや、いい」

そのまま奏は太一を連れて來た。

それから、一人を家の前まで送つて、ヒカリちゃんに薬を渡して別れた。

「お兄ちゃん、お風呂に入らう」

「ああ」

三歳なのに、やつてゐ事は違つよな。まあ、お風呂は小さな子供用だけどな。

そして、お風呂からあがつたら一人で一緒に寝て、起きたら勉強だ。

更に月日が流れて、俺の生活は朝練、朝食、勉強、昼食、訓練、遊び、おやつ、遊び、研究、開発、夕食、散歩、お風呂、勉強、就寝という生活を続けている。そして、お台場に引越しした。

「おはよう、ヒカリちゃん」

「うん」

「おはようヒカリちゃん」

お世よ、つ奏ちゃん、「ウ君」

学校ではヒカリちゃんとも仲が良いが、太一がマジで邪魔だ。太一とは喧嘩ばかりしている。

授業が終わって放課になると、太一と喧嘩するんだけど、どうしても負けてしまうからヒカリに近づけ無い。

「マジ、太一
邪魔

「また太るよお兄ちゃん」

いらっしゃるから勉強しながら、お菓子を食べてたら太りだした。

「だつてさ、強くなりすぎて、本気でやつたら怪我させて、ヒカリちゃんを悲しませてしまひから駄目だしな」

「まあ、別にいいけど……」

そんな生活をしてみると、七戸三十一日になつた。

初めての「デジタルワールド」

今日は七月三十一日、明日は運命の日、町内会キャンプの日だ。ところが、太一を出し抜いてヒカリちゃんの家にお邪魔しました。

「診察に来たよ、ヒカリちゃん」

「うそ。よひこへお願ひします／＼／＼

医学方面に頑張つたら、新薬とか開発しまくったから博士号と医師免許がアメリカで取れたから、ヒカリちゃんの診断を合法でしている。

「んじゃ、服脱いで」

「うん／＼／＼

服を上げて貰つて、心音などを聴いてカルテに書き込んで行く。ぶつちやけちょっとHツチなお医者さん」じだ。

「ちよつと風邪気味だけど、この薬を飲んであつたくして寝てくれればいいよ」

「うそ、ありがとう」

「もういえば、明日の買い物終つた?」

「今から行こうと思つてる。一緒にいかないかな？／＼／＼

「いいよ。ついでに色々買って行こうか」

「うん」

それからヒカリちゃんとお出かけだ。

タクシーを呼んで、買い物に出かけた。発進する時、帰ってきた太一が何か叫んでたが無視した。

「ねえねえ、似合つかな？」

「うん、いい感じ。うちのワンピースもいい感じだ」

今はブティックに来て、ヒカリちゃんの服を選んでいる。

「秦も似合にそうだし、ペアルックにしてみたらいいよ」

「確かにいい感じ…………でも、お小遣いが足らないよ…………」

「いいよ、プレゼントするし、秦と一緒に着た姿を見せてくれたい
いから」

「いいの？」

「お金に不自由はないしないしな。じゃ、会計してくるね」

「うふ

ヒカリちゃんが持っていた服とワンピース一着を購入して、アウトドアショットに向かう。

「あははは、これおつきい！」

「何人で寝れるんだる」

寝袋や様々なサバイバル用品を購入してデジヴァイスに仕舞つた。このデジヴァイス、アイテムボックス機能まで付いていて、かなり便利だ。

「何でそんなに買つてるの？」

「もしものため？」

「起つるの？」

「異常気象が続いているからね」

本当は現実にサバイバルが必要になるんだけどね。

「じゃあ、次どこに行く？」

「うーん、必要な物は揃つたし……エセルちゃんは何かない？」

ヒカリちゃんは「ジモンについても覚えているし、Hセルドレーダの事も教えてある。

「私はマスターに従いますが……」

「良いよいつてみ？」

「あれが食べたいです」

Hセルドレーダが指差したのはクレープ屋さんだ。

「おいしそう」

「じゃ、決まりだ

そう言った瞬間、Hセルドレーダは犬耳としっぽをパタパタと嬉しそうに振りだした。

「行こう、ヒカリちゃん」

「うん」「

手を握つて連れていき、クレープ屋さんに並びながら、注文を決め
る。

「まだかかるね」

「暇だから遊ぼうか

「歌が良いかな……………駄目?」

「無問題」

そして、俺は太った身体に似合わない歌声を披露する。全てデジモ
ンアドベンチャーの曲で、声は歌手そのもの。練習したら出来るよ
うになった。

「凄いね！」

回りからも拍手が貰えたが、恥ずかしいぞこれ。

「注文どおり、さつきの御礼にサービスしてあげる」

「じゃあ、おつきに生地にトッピング全部を一個だけ

「はーい」

ちょっと高かつたが、三人で交代しながら完食した。

「あつ、クリーム付いてる」

「あう／＼／＼

口元に付いていたクリームを取つて、食べるとかなり恥ずかしがつ
た。可憐い。

「「ウ君いなや…………」

「「＼＼＼＼」」

仕返しされて、結局一人で照れた。

それから、水族館へ行つてから俺の家に帰つた。

今日はヒカリちゃんも泊まつていく事になつたからだ。

「奏、ただいま」

「お邪魔します」

ちなみに、明日の準備はヒカリちゃんのも含めて全て此処にある。

「いらっしゃつヒカリちゃん。ゆつくつしていってね」

「はい、お邪魔します」

母さんも含んで、四人で食事をして三人 + 一匹でお風呂に入つた。ヒカリちゃんはかなり恥ずかしがつたが思いつきり手洗いしてあげた。逆に奏は洗つてくれた。

「お休み」

「「お休みなさい」」

そして、川の字で寝た。

次の日、着替えてからヒカリちゃんと奏を診察した後、朝食を取りながら報告した。

「ヒカリちゃんは少し熱っぽいけど、大丈夫だな。奏は健康体だね」

「それじゃ、キャンプに行ける?」

「問題無いよ。ただ、色々気をつけなくちゃいけないけど……」「うわすめ……」

「こります」

「なら、一緒にしてるよ」

ヒカリちゃんは身体が弱い部分があるからね。

「準備出来たよ」

「それじゃ、行こうか」

「うん」

それから、準備して集合場所に向かった。

集合場所では太一達連れ子供やが待っていた。

「お兄ちゃん、おはよ!」

「ヒカリ、大丈夫だつたか？」

「大丈夫だよお兄ちゃん。心配しそぎだよ」

「いや、そつちの意味じやねえが…………」

太一の相手はヒカリに任せよう。

「先生、来ました」

「月島コウキと月島奏、八神ヒカリだな。それじゃ、お前達は同じ班だ。支給品は確認しておいてくれ」

「分かりました」

それから、太一達とは別のバスに乗ってキャンプ場に向かった。

そして、キャンプ場に着いたら、ヒカリちゃんと奏と一緒にテントを用意してその中にいる。

「暇だな」

「確かに暇」

奏はパソコンで何かしている。ヒカリちゃんはデジヴァイスを興味ぶかそこに見ている。

「うん」

「何か無いかな？」

適当にデジヴァイスを弄つていると、デジヴァイスがすっぽ抜けて奏の弄つているパソコンの画面に……あつ、デジタルゲートが開いた。しかも、吸引力強すぎー。

「くつ」

「あやあつー?」

「うつ」

奏も吸い込まれたけど、奏は特殊なので大丈夫だらうから、ヒカリちゃんを抱き寄せて守りながらデジタルゲートを潜つた。

「ひかりちゃんした意味の解らない空間を通つて着いたのはファイル島みたいだ。」

「ヒカリちゃんも無事だし、デジヴァイスのシステムも問題無いか

…………

この時点でヒカリちゃんが此処にいると原作ブレイクだな。まあ、

「」ひのは裏で進むか。

「問題ある」

「えっと…………秦か？」

姿が銀髪の天使ちゃんから狸耳が生えたムジナ…………ムジナモンの姿になっていた。

「半分デジモンだったからそっちになつたんじやないか？ 何か問題はある？」

「問題は元の姿戻れなくなつた」

「まあ、面白がつた神様のせいなんだろうがな。それにフロンティアでデジモンになつてたから同じ感じかな？」

「解らぬいけど、お兄ちゃんを守れる力を頼んだらこうなつたから」

「んん…………」

ヒカリちゃんが眼を覚ましたみたいだ。

「起きた？ ちなみに、」」」はデジタルワールドで現在帰る方法は解らない

「そんな…………」

「大丈夫。俺がヒカリちゃんをどんなことをしても守るから」

「あつがとへ…………あれ、奏ちゃんは？　それに、『のトジモン
せんせー』」

まあ、普通はそうだよな。

「『の子はムジナモン。そして、奏でもある』

「私は半分デジモンだから

「わうなんだ…………じゃあ、これからはムジナちやんって呼ぶね

「うふ

流石ヒカリちゃん。デジモン関係の順応性が半端無い。いや、普通にデジモンの話とか色々してたけどね。

「それじゃ、探索しようか。ヒカリちゃん、立てる？』

「うふ。大丈夫だよありがと」

ヒカリちゃんとの手を取つて起こし、そのまま手を繋いで移動する。やつぱり最初は森の中だ。

「取り敢えず、水場をさえ有れば一ヶ用は持つかり、ムジナは上から探して」

「うふ

ムジナはジャンプして木の上に登つて、水場を探してくれる。

「あつ、私のバックだ」

「俺達のもあるな」

回収しておこう。

「ヒカリちゃん、普段歩くときに必要な無い奴はこっちで預かるよ」

「ありがとう」

バックを預かつて、アイテムボックスに入れておいた。ヒカリちゃんもポーチに入るだけで充分みたいだし。

「歩くの辛くなったら言つてね。オンブだつて出来るし」

「うん、大丈夫」

ヒカリちゃんは溜め込むから、気をつけなくちゃな。

それからしばらくして、大きな泉の辺まで来た。

「ここで今日は休もう」

「だ、大丈夫……だよ？」

「駄目。それに俺も疲れたからね。ほら、木陰で休む」

ヒカリちゃんを木陰に座らせた後、泉の周りを調べる。

「水嵩の増加は大丈夫。水質は……………沸かせば平氣だな」

水質調査などの機能をデジヴァイスに追加して正解だつたな。
次に過機を取り出して水を綺麗にする。
そんな事をしていると、水から竜が現れていきなり攻撃を仕掛けて
来た。

「シードラモンか…………」

シードラモンの攻撃……………水のブレスをバックステップで避けて、
指示を出す。

「ムジナは前衛を頼む」

「うん」

懐からカードを取り出して、攻撃プログラムを選択する。

「攻撃プログラムA、カードスラッシュ！」

カードを読まると同時にムジナの中にデータが入り込んで、ムジ
ナを強化した。

「リロード、エセルドレーダ！」

「マスターのお望みのままに」

「カードスラッシュ、天狼星の弓！ エセルドレーダはムジナの援
護を頼む」

「イエス、マスター」

シードラモンの顎にムジナが蹴りを入れて浮かした所に、エセルドレーダの矢が次々と突き刺さり、データへと還元される。

「反応はまだ沢山いるぞ！」

「ぐつ！」

出て来たシードラモン達によつて、不意打ちを喰らつたムジナは吹き飛ばされてヒカリちゃんの近くにある木に激突した。

「「大丈夫！？」」

「痛いけど問題は無い」

「こいつら…………よくもムジナを…………許さない！」

「ぶつ殺す！」

「んつ、なんか気持ちいい」

デジヴァイスが光つて、ムジナとエセルドレーダを黒い光りが包み込み、黒い光りが無くなり、中から現れたのは少し成長して黒刀を持つたムジナと同じく成長（人間サイズ）して天狼星の弓を持ったエセルドレーダだった。

「憎しみで進化した？」

「カツコイイ…………」

「うん、進化した…………それじゃ、斬る」

「マスターの為に、全部落とす」

先程より速くなつたムジナは、接近した瞬間、ジャンプして的確にシードラモンの首を一閃して叩き落とした。エセルドレーダは次々とシードラモンの両目を射ぬ射て脳を破壊し殺していく。

「こつちも派手に行ぐぞー！ デジメモリ、ガルルモンフォックスクファイヤー！」

SDカードの様なデジメモリをデジヴァイスに挿入すると、半透明なガルルモンが出て来て、シードラモンに必殺技を放ち、消えて行つた。

そして、二十分後には大量にいたシードラモンは全てデータとなり、ムジナとエセルドレーダに吸収された。

怪我の確認等をしてようやく落ち着いたので、次の作業に入る。まず、デジヴァイスのアイテムボックスからテントに折りたたみ机、ガスコンロなどを取り出して設置して行く。

「凄い」

「いつも入れっぱなしだけどな」

「手伝うね」

「お願ひ」

皆で準備したら、鍋にろ過した水を入れて沸騰させる。そして、アイテムボックスに大量に入っているインスタント食品……どん兵衛を取り出し、湯を入れる。五分後、美味しいうどんが食べられた。流石、非常食。

後、ろ過した水を沸騰させて冷やしてからペットボトルに入れて飲み水にした。

ヒカリゲット（前書き）

かなり「都合的」になつてます。

ヒカリゲット

Side ヒカリ

「デジタルワールドに迷い込んでから三日、私とコウ君はこの島の中を歩いているの。」

「大丈夫？」

「はあ、はあ……大丈夫だよ……」

「この島に来てから私は足手まといになつていてる。『デジモンもいないし、大量も無い』……何か役に立ちたい。」

「コウ君の方こそ怪我は大丈夫？」

「これくらい平氣だよ」

「よかつた」

「あれはヒカリちゃんのせいじゃないから」

「コウ君はダークティラノモンに襲われた時、私を庇つて何度も攻撃を受けて怪我をしたの。」

「何とか撃退出來たし、大丈夫だよ」

「うん……」

本当は大丈夫じゃないのは分かってる。ムジナちゃんもエセルちゃんもデジヴァイスの中で休息を取らないといけないほど弱ってるから……私に出来る事、何か無いかな?

「ちつ、さつきの奴等か……」

「つー?」

木々を破壊して出て来たのは、黒いティラノザウルス、…………ダーキティラノモンが三体…………恐くて身体が震えて動かない…………また迷惑かけちゃう…………どうじみつ。

「手詰まり…………仕方ない、虎の子を切るか…………デジメモリ、ホーリーエンジュモン…………ヘブンズゲート」

半透明なホーリーエンジュモンが現れて、ダークティラノモンを門から降り注ぐ光の柱で倒してくれました。

「使えるデジメモリもこれで、弱い奴しか無いな。それより、ここはファイル島じゃないのか?」

「はあ、はあ……」

何だろ、身体が重くて苦しい。

「ヒカリちゃん！？ くそ、何処か休める場所は…………」

コウ君の慌てた声を聞きながら私の田の前は震んで行き、何も見えなくなつた。

守られているような何か、暖かい温もりを身体全体で感じていると、何か身体を這う様な気持ち悪い感じがして薄く眼を開けると、目の前にはコウ君の顔があつた。どうやら、コウ君に顔を舐められていたみたい。

「何してるの？」

「あ、気が付いた？」

「うふ…………ふ／＼／＼」

意識がハツキリした私は、自分が寝袋の中でコウ君と裸で抱き合つていて、コウ君の手が私のお尻や背中を触つていて、お腹に変な感触がある。

「ヒカリちゃんが倒れたから、急いでこの洞窟を見付けて中に入つて看病してたんだけど、ウイルスに侵されたみたいで、普通の薬じゃ効かないから、免疫力を高める薬を投与して、暖める為に裸で抱き合つてたんだ」

「よくわからいけど、舐める理由は無いよね？」

「それは…………俺がヒカリちゃんの事が好きで、可愛い寝顔を見てたら我慢出来なくなつたから…………後悔はしていないけど、ごめん」

「あう／＼／＼

私はコウ君の事…………嫌いでは無いけど、良く判らない。

「いみんなそこ。まだ、良く判らないの」

「そつか

落ち込んだ顔…………やだな…………あれ、これなら私も役に立つ?

「でも、嫌いじゃないから」

「あつがとつ」

頭を撫でてくれる感触は気持ちいいし、暖かくなるの。

「あの、私の身体…………コウ君がしたいなら…………舐めて良いよ」

「マジでー」

恐いくらいに眼がギラギラしてる…………鳥肌が…………我慢しなきや。

「うん。私が足手まといだからコウ君の役に立ちたいの。コウ君が満足するなり、私の身体…………恥ずかしいけど好きにしていいよ

/ / /

「好きな女の子を守ってるだけだから、別に足手まといとか思つてないよ。でも、本当にいいの？ 絶対、一度やつたら止まらないよ？」

お願いします。あう//

それから、優しくキスをされて、口の中や身体全体を余す所無く舐められた。最後に頭を撫でてくれて、喜んでる顔を見ると気持ち悪い感じにも耐えられた。

四日後、デジタルワールドに来てから一週間、私の身体の体調は安定してきた。まだ、注意は必要みたいだけど、新しく調合した薬を飲んでからは大分楽になつた。それに、毎日数回に渡つて身体を舐められて慣れたのか、気持ち悪いのが気持ち良く感じるようになつきました。

はい、今日の薬……ん？」

「んんっ、ちゅっ、んぐ」

毎日口移しでお薬を貰っているので、キスも好きになりました。それに、求めてくれているから役に立つている事が分かつて私も嬉しいです。

「またやつてる」

「お帰り、ムジナ」

「お帰りなさい／＼／＼

「ただこま。食料取つて来たから…………」

私達はこの洞窟で生活を続けています。ムジナけやんが食料や薬草を取つてくれて、口ウ君とHセルちゃんが調合してくれています。

「マスター、この洞窟を拠点にしてこの場所を詳しへ調べるところと思います」

「やうだな。何だか、これはフライル島じやない気がする」

「それでここへ修業して行きたい」

「それでここな」

HセルちゃんにはHネと書いて、小さこままで、食事しながら会話をしています。

「私も手伝える事ある?」

「安静にしていて」

「むー」

「ウ君の相手だなじや無く、もつと役に立たたいんだがど……
駄目なのかな?」

「拗ねないで……じゃあ、料理を教えてあげるから」

「うん」「

「じゃあ、ベットでも作ってみるか」

作れるのかな?

「お風呂が欲しい」

「お風呂か…………少し考える」

「「お願いします」」

私は寝袋の中から隣で作業しているコウ君を見詰めている。
「コウ君は、ムジナちゃんが持つて来た木を使ってベットを作りたい
していきます。」

「皮は剥いだし、ムジナから借りた刀で四角形に切り取つて……
……」

「コウ君は角材を次々と作つていきます。その角材は作れば作るほど
上手くなつていっています。作業に没頭する姿はなんだかカッコイ
イです。」

「釘なんか無いし、挿入形式でやるか…………といふで、腰をじり無い？」

「暇じゃ無いよ。見てるだけでも楽しそう」

「わづか…………なりここせ」

「えつ」

頭を撫でられると氣持ち良くて熙くなつて来ちやう。

「わづか、続きだな」

「頑張つて」

「おつ」

角材の一部をくり抜いて、合わせて組み立てて行くと、グラグラするベットが出来ました。

「やつ直し」

何度もやり直して、ちゃんとしたベットが出来ました。ベットの上には大きな葉っぱとキャンプ用のマットに寝袋を開いた状態で敷いて、その上にシーツを被せ、毛布と布団を用意して完成となりました。

「凄いね。わづかとしたベットになつてね」

「うん、我ながら頑張った

「しかし、マスター…………汚し過ぎですか」

「あははは」

木片などは燃やしたりこけど、ベットの失敗した物まだあります
だろ？。

「なら、扉にするか」

「え？」

「ウ君は残った角材も使って、洞窟の入口に扉を作つてカモフラージュまで施してしまいました。

「やばっ、楽しくなつて來た」

「あははは

その日の夕方には洞窟の中も補強されて、天井、地面、壁を全て木の板に変えてしました。

「凄く快適になつたな」

「うん。やつ過ぎな感じもするけど…………」

「流石マスターです。明日はお風呂ですね」

「確かにそうだ」

そして、次の日こは近くの河原にお風呂が出来ました。木と石で出来た場所に川の水を流し込んで、焼いた石で水をあつためる簡単なお風呂だけあると無いとでは全然違います。

皆でお風呂に入った後、私は何時もの通り裸でコウ君に身体を任せました。

「ヒカリちゃん、そろそろ次に行こうか……」

「？ 私はコウ君に全て任せます」

「そう、ならヒカリちゃんの全部を貰うよ

「どうぞ？」

意味が解らない私はそのまま身を委ねて、コウ君の物が私の中に入つて来た時、余りの痛さで泣き叫んだのですが、コウ君は止めてくれなくて、私の中に何かを出してきました。

「ごめん、止まらなかつた」

「寝るまで、頭を優しく撫でてキスしてくれたら許します」

「ありがとう。愛してるよヒカリ」

そして、その日から私の生活はまた変わりました。痛みに慣れるまで何度もされではキスをされながら頭を撫でられる…………そして、だんだん真っ白になつて行く頭の中で大好きや愛してるの言葉が私

の中で大きな割合を占めて、「ウ君の存在がどんどん大きくなつていきました。

「あのね、ムジナちゃんから聞いたんだけど…………」「ウ君、ちゃんと責任取つてくれる?」

ちゃんと教えて貰つたら、事の重大性を理解出来たから「ウ君に尋ねてみた。

「勿論だよヒカリちゃん」

「私とムジナちゃんをお嫁さんにしてくれる?」

「うん。俺も一人が大好きだし当然…………え?」

驚いた顔をした。少し嬉しいな。

「ヒカリちゃんはそれでいいの?」

「うん。ムジナちゃんともしての知つてるし、親友同士、ずっといられるから…………あつ、エセルちゃんもだね」

「まあ、ヒカリちゃんがそれで良いなら良いや。大好きだよヒカリちゃん」

「私も大好き」

前から私の為に色々してくれていたけど、身体を重ねるついに気が付いたら大好きになつていた。

「じゃあ、寝よつか

「お休みなさい」

最後にキスして、私は暖かい温もりに包まれて眠りに着いた。

次の日、朝起きてキスしていると、扉を突き破つて何かが私の手元にやって来た。

「これはデジヴァイス?」

「ヒカリちゃんのデジヴァイスみたいだね」

「でも、デジモンがないね」

「こずれ巡り会つよ。その間はエセルドーレーダ達を自分のデジモン仲間として一緒に入ればいいよ」

「うん」「

未来の為にも大好きなコウ君やムジナちゃんとエセルちゃんと一緒に懸命生きなきや。

ヒカリゲット（後書き）

原作介入はファイル島からか、サーバー大陸か、ヴァンデモンまで
隠れるか分かりません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4496ba/>

義妹と忠犬引き連れて転生したので、好き勝手に楽しむ！

2012年1月12日16時58分発行